

主題	排泄方法に対する支援の改善の取り組みとQOLの変化について		
副題	あたり前の排泄を行うことで元気ある生活を取り戻そう		
排泄介助			
研究期間	3ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム 養浩荘
発表者：水谷 恭敏（みずたに やすとし）		アドバイザー	
共同研究者：宮本 哲夫			
電 話	03-3971-6541	メール	
FAX	03-3971-8254	URL	

今回発表の事業所やサービスの紹介	昭和56年に池袋4丁目に開設し、今年で31年目になります。特別養護老人ホーム50床、ショートステイ8床、デイサービス（認知症対応型含む）42名、ホームヘルプステーション、地域包括支援センター、居宅介護支援事業所があります。ボランティアの方も大勢活動してくださり、地域と共に安全で快適な生活を支えるために心のこもったサービスを提供しています。
------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

当施設では定員50名中、日中のトイレ利用者が約半数である。ベット上でのおむつ交換対応の25名中5名はかろうじて立位が取れる状態である。

今回の対象者は、両下肢の拘縮のため立位が取れなかったが、便意、尿意が期待できるためポータブルトイレを利用していた。その後車いすからのすり落ちによりおむつ対応となった。便秘ぎみになり食欲も低下し活気も無くなり、体力も衰え臥床の希望が強くなるなど廃用性の症状が進んでしまった。

下肢の関節の痛みの改善がみられはじめ、徐々に離床できる様になった。本人もトイレでの排泄を望んでおり、以前よりも下肢筋力の衰えや拘縮が進んでいるがポータブルトイレでの排泄を再開したい。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

本人の希望であるポータブルトイレでの排泄の再開を実現し、日常生活を活性化させ、便秘や食欲不振、体力低下の改善をする。

フロアで過ごす時間を増やし、以前の様に周囲の人との交流を楽しむなど人間関係を豊かで相互的なものにし、元気に活気のある自発的な生活を取り戻したい。

《3. 具体的な取り組みの内容》

○本人の希望を実現させる為に、機能訓練指導員や医務等他職種と相談、検討を行い、再開時期や方法を決定した。

○本人に声掛けを行い同意を得る。衣類、オムツの脱着はベット上で行い、端座位になり、ポータブルトイレへ移乗する。排泄後ベットへ移乗する。

○体調、様子観察を行い離床時間を増やしたり、外出の機会を作る等本人の希望をきいていく。

《4. 取り組みの結果と考察》

○職員からの声掛けに対し、初めは面倒くさがり拒否されることが多かったが、再開後3ヶ月経過し徐々にポータブルトイレに座っていただく機会が増えていった。また、座っても排泄されないこともあったが、腹圧をかけるため『ふんばる君』を使用する様にするなど工夫した結果ほぼ毎日排便されるようになった。

○オムツ交換当時は表情も乏しく、笑顔も少なかったがポータブルトイレでの排泄が進むにつれ、表情が明るくなり発語も増えて来た。フロアで過ごしている時はTVを鑑賞していることが多く周囲の方と会話することはなかったが、最近は自ら話しかける姿がみられ談笑して過ごす時間が多くなっている。

○以前の様に、隣接する商店街や近くの東武デパートへの買い物、外食の希望がでてきた。また、小学生や幼稚園児の来荘など地域との関わりを楽しまれるなど笑顔が多く見られてきている。

《5. まとめ、結論》

再びポータブルトイレでの排泄を行えるようになり、自分に自信を持つことが出来はじめたことにより自発性が生まれてきた。施設生活を活性化し明るく元気な生活を取り戻し始めている。

ベット上おむつ交換の方も状況に応じてトイレを使用する場合もあるが、環境を整備し一人でも多くの利用者がトイレでの排泄が行えるようにしていきたい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認し、本研究発表以外には使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得た。

《7. 参考文献》

大田 仁史 三好 春樹（2005年）実用介護事典 講談社

竹内 孝仁（2012年）水 公益社団法人全国老人福祉施設協議会

《8. 提案と発信》

人間は排泄をするときに「直腸の収縮力」「腹圧」「重力」を使っているが、座ることによって「腹圧」「重力」を最大限に利用できる。様々な身体・精神状態の利用者がいるが安易にオムツ交換にせず、的確な環境アセスメントを行いトイレでのあたり前の排泄を支援することの大切さを実感している。また水分補給はケアの基本である。ジュース摂取のチェック表をつけているが、これを拡大しきちんと水分摂取も確保できるようにしていきたい。

【メモ欄】